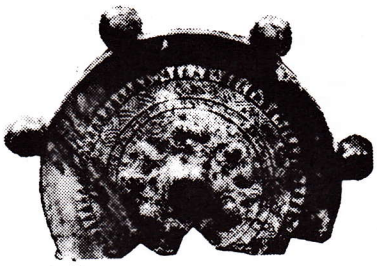
第22号　平成9年6月1日

文化財やまと

大和町文化財保護協会発行



七鈴五獣鏡

大和町において出土した中国古銭が語るもの

会長　土松新逸

昨平成八年、大和町島（野口）大間見（友久）において中国古銭が一万六千余枚出土したことについては、本年三月出版の大和町郷土史研究会会誌「史苑やまと」第二号に、畑中会長および武藤委員が詳しく述べておられるが、これらは、昭和四三年五月万場（野尻）において出土した古銭（三千枚ほど出土したが五百枚ほど散逸し、二千五百枚を大和町重要文化財に指定された）及び昭和五五年から五八年にわたり発掘調査された東氏館跡から出土した中国古銭と共に大和町の貴重な文化財であり、大切に保存されなければならないものである。

全国各地では、同様の埋蔵銭が相当数報告されているようであるが、岐阜県内においてはこうした中国古銭の大量出土は、まだ他にその類を見ないようである。

これらは、埋蔵されてから長い時間と歴史の変遷の中においての偶然のできごとながら、大和町内においてこのような大量の中国古銭が出土したということはまことに不思議なことであり、歴史の「なぞ」を考えさせられるものである。

右当町出土銭の解明調査について、昨年七月野口出土のものの報告を受けたので、早速町史編集委員の諸氏と共に出土現地へ赴き出土銭を預かり、容器の発掘調査に当たったが、残念ながら容器は底部しか回収出来なかった。県文化課から派遣された小野木学芸主事のアドバイスにより兵庫県埋蔵調査会発刊『日本出土銭総覧』一九九六年版をとりよせ、この図書の助けによって町史編集委員九名の総力と郷土史研究会委員有志の協力を得て解明整理に当たったのであった。野口出土銭の整理が終わるころ大間見友久においても出土したことがわかり、これも同様解明整理し、さらに、さきに出土した万場野尻のものも整理することとなり結局大和町内出土古銭の全部を整理するため平成八年七月末から同九年一月まで約半年間かかった。その結果大和町出土の中国古銭は、万場出土のものは唐時代の開元通宝から元時代の至大通宝（一三一〇）まで四四種二四六五枚余であり、大間見出土銭は開元通宝から明時代の宝徳通宝（一四三三）と朝鮮通宝（一四二三）琉球銭世高通宝（一四六一）まで五六種一〇七〇八枚余、島出土は大間見出土銭と同じく五六種五四四〇枚余、東氏館跡出土は開元通宝から政和通宝（一一一一）一二種一八枚余（種類の判明せぬかけらは余りと表現す）総計五六種一八六三一枚余となる。

古銭出土土地の所有者について考察するに、島（野口）地区の土地所有者遠藤巌氏は、中世においてこの地方を支配した東氏に仕えたという家系であり、同家の旧家敷跡から出土したものである所から東氏危急の際（応仁二年）用金を埋蔵したのではないかと考えられるものである。

大間見（友久）地区の土地所有者清水氏の先祖には「友久」を名乗りこの地区の名主的存在の家であったといい、この友久家の北方にあった諏訪神社の祢宜を勤めたことが江戸時代の記録にあり、埋蔵されていた所は往時の友久家の前庭の一部と見られるところである。

また、この地は往時、現在の白鳥町那留を経て白山長滝へ、更に越前へ通ずる交通の要衝であったので、この地に中世の関所があったことも考えれる。なお、この地の近くにある清浄寺の開祖松井新左衛門実本は東氏の家臣であったと伝え、この地と東氏とのつながりも推測でき、やはり東氏危急の際に埋蔵したと考えられる。

しかも右二か所の出土銭の内容が全く類似していることを考え合わせるとき、この埋蔵銭の「なぞ」が説けないかと思うものである。

こうした埋蔵銭はまだ他に相当にあることも考えられる。

中国の洛陽・竜門石窟と古寺巡拝

畑中浄園

大垣市の「仏像を拝む会」の会長臼井千吉氏からお誘いをうけて去る三月一二日から一八日にかけて中国を再訪問する機会を得た。今回は洛陽がスケジュールの中にふくまれていたので特に旅心をそそるものがあった。

上海から鄭州へのフライトは悪天候のため漢口へ不時着、天候回復を待ってようやく鄭州の飛行場に着陸して安堵する。鄭州からさらにバスで二時間余り、洛陽の牡丹大酒店（大酒店はホテルの意）に入った時は夜もふけていた。

一夜明けて一四日、窓外に展望する町、洛陽の朝である。多年憧憬していた洛陽、今ここに身をおいている感慨は一入である。

古都洛陽　洛陽は西安（明の時代から長安を西安と称す）と共に中国の二大古都である。洛陽が始めて中国の都となったのは紀元前七七〇年、周が北方民族の侵入によって鎬京（長安）から都を洛邑（洛陽）にうつした時からである。この時から周を東周といい、いわゆる春秋戦国時代（約五五〇年間）である。孔子（前五五一～四七九）孟子（前三七二～二八九）老子（前四世紀ごろ）をはじめとして九流百家といわれる思想家が活躍したところである。紀元後になると、東漢（後漢）およそ二〇〇年間をはじめとして、三国時代の魏・西晋・五胡・北魏に至る間、およそ千余年の長期に亘る国都であった。

日本の古都京都が延暦一三年（七九四）平安京となって以来、明治元年（一八六八）東京遷都まで一〇七四年間国都であったことと頗る類似している。いつの頃からか、京都を洛陽にたとえるようになった。親鸞聖人の『教行信証』後序に「洛都の儒林、行に迷うて云々」「建暦辛の未の歳（一二一一）勅免を蒙りて入洛して已後、空（源空）洛陽の東山の麓、島部野の北の辺大谷に居たまいき」とある。また『平家物語』の巻七「主上都落」の項にも「上洛」の語があるので鎌倉時代の前半ごろにはすでに京都は洛陽の異名をもっていたことがわかる。

洛陽は古くから日本との関係が見られる。中国の史書『後漢書』巻一一五の「東夷伝」に「建武二年（西紀二年）倭奴国奉貢朝賀、（中略）光武（初代光武帝）賜以印綬」とあり、続いて同書に「安帝永初元年（一〇七）倭国王帥升等、献生口（奴隷）百六十人」とあって、日本の弥生期にすでに洛陽を訪れている。さらに邪馬台国の女王卑弥呼が二三九年魏に使いを遣わし、「親魏倭王」の称号をうけたことを『魏志倭人伝』にのせていることは周知の通りである。

洛陽の初日の朝はこうした歴史を懐古するに充分な景観であった。

竜門石窟　午前八時ホテルを出たバスは今日の目的地竜門に向かった。車窓に展開する洛陽の街は静かで車の往来も少なく、高層ビルも見えない。街路樹は高く、まだ芽をふかないスズカケの並木が続く。古都の匂いが車内に通ってくるようである。およそ二〇分ほどで車窓に伊水の流れ（黄河の支流）が見えてきた。竜門近し、車内に緊張がはしる。伊水の幅はおよそ一〇〇m余もあろうか、想像していたより大河である。

この河を挟んで標高三〇〇m余の香山（東岸）と竜門山（西岸）が並び立ち、その山裾の両岸に石窟が相向かって彫られている。この石窟は、大同の雲崗石窟、敦煌の莫高窟とともに中国の三大石窟といわれている。

何故にこの竜門の石窟が彫られたのか、そのいきさつについて考えるに、北魏王朝が五胡一六国を統一し長城近くの大同に都した。第二代の大武帝は道教を信奉し、道士寇嫌之にそそのかされて仏教を弾圧し、廃仏毀釈を行った。華北の僧尼は還俗させ、寺院・仏像を悉く破壊した（四四六）いわゆる三武一宗の廃仏の最初の廃仏であった。この大武帝が没して、孫の文成帝が即位（四五二）すると祖父の減罪のために、大同の西雲崗武周川の岸壁に石窟を造営した。それは東西約一kmにわたって二〇数窟が並び、その彫像は西方直模式といわれ、ガンダーラ様式やグプタ様式がとり入れられた。それは素朴で顔は長く左右均斉しており、日本の飛鳥仏に大きな影響を与えている。

この石窟事業は次の献文帝・孝文帝によって引き継がれた。孝文帝は北魏の文化の発展につとめ、さらに漢文化にあこがれて、都を大同から黄河の支流洛水のほとりの洛陽に遷都した（四九三）

帝は洛陽の東南伊水のほとりで石窟事業を継続した。これが竜門の石窟である。その後も北朝から隋・唐・北宋へと数百年もの長期に亘って掘削事業が続いた。石窟は一三五二カ所、仏像は九万七千余体、全長一kmにも及ぶという。

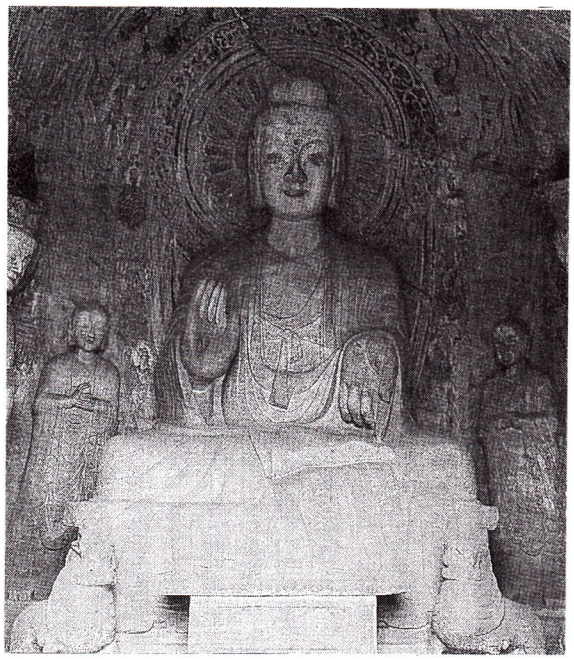
午前中は東岸の石窟を礼拝し、午後は西岸の石窟を巡拝した。中でも感慨の深かったのは西岸の濵陽洞と古陽洞であった。この両窟は、北魏が洛陽遷都後間もなく着工されたもので、「銘文には太和十九年（四九五）景明三年（五〇二）

正始元年（五〇四）とある」と案内して下さった竜門石窟研究所副所長の李文生先生から説明を受けた。濵陽洞の主仏釈迦坐像（高六、四五m）は面長で頬は角張り古拙の微笑をたたえた口もとなど遷都以前の雲崗石窟仏とその形態は全く同じである。恐らく雲崗で彫刻していた工人達がそっくり洛陽へ移ってきたものと考えられる。古陽洞の仏像も、大小いくつかの仏龕に素朴な諸仏が刻まれている。

濵陽洞と古陽洞のほぼ中間に、奉先寺洞がある。この洞は西岸石窟群の中心であり、その規模は最も大きい。唐朝の第三代高宗の勅願によって開削されたという。中央に高さ二〇mの盧舎那仏が座しその左右に二比丘（一二m）二菩薩（一七m）が立ちその横に二神将と二力士が立っている。仏顔は円形豊満、写実的で北魏仏の面影は全く見られない。

このほか万仏洞には阿弥陀仏座像（約六m）を中心に両壁にぎっしり諸仏が刻まれている。

巡拝していると、中には首が欠けている像、鼻の部分が剥落した像がある。長い年月の間に損じたものと思われる。この膨大な石窟を保護管理することの困難さを思う。中には盗難にあった像もあるという。しかも中国が近代化するにつれて、大気汚染が甚だしく、今後の保護手段の重要さを痛感する。



北魏様式の浜陽洞の釈迦仏

急な石段の上り下りで足が思うように動かない。しばらく腰を下ろして眺望すれば、伊水の両岸には枝垂れ柳の並木が芽をふいて、うす緑の枝をたれている。その下の歩道を中国の兵士が数人、武具も持たずに散歩している。その姿はきわめて平和的である。

朝から夕刻まで竜門石窟の巡拝で疲れた身体をホテル牡丹でいやし洛陽の第二夜をすごした。

白馬寺　明けて一五日、元気を回復した一行は洛陽市街の東、白馬寺にむかった。中国で始めて出来た寺院といわれている。二段の屋根で中央高く白馬寺の額をかかげた煉瓦造りのドーム型の山門をくぐると、天王殿の前に銅板の寺標があり、馬が左右から向き合い、前足の一本を高くあげて、その中間に、白馬寺と縦に彫られ、その上部には紫に色どられた横額に南無阿弥陀仏と彫られている。天王殿・大仏殿・大雄殿が並び、何れも朱ぬりの豪華な建造物である。

仏教が始めて中国に伝来した時期については、古来諸説があって現在でも定説はない。ただ一般的にいわれているのは後漢（東漢）の明帝の永平一〇年（紀元六七）に迦葉摩騰・竺法蘭の二人の僧が白馬に経典を積んで洛陽に来た。帝は喜んで洛陽門外に白馬寺を建立してここで「四十二章経」を訳出させたという。

広い境内には李の花が咲きこぼれ、洛陽に春がきたことを告げている。この花を見ていると、唐の詩人劉鄭芝（六五一～六七九ごろ）の詩がうかんでくる。

洛陽城東　桃李の花　飛ひ来り
飛び去って　誰が家にか落つ
洛陽の女児顔色を惜み　行くゆく落花におうて　長く歎息す
今年花落ちて　顔色改まり　明年花開くも　また誰かあらん
已に見る松柏のくだけて薪となり　更に聞く桑田変じて海となるを　故人また洛城の東になく
今人また対す　落下の風　年々歳々　花相似たり　歳々年々人同じからず（下略）

千三百年も前、初唐のころの洛陽の姿、それは政治の中心が長安（西安）に移り、静けさをとりもどしたが爛熟した文化都市の悲哀がつたわってくるように思われた。

恐らく再び訪れることのない洛陽に名残りを惜しみつつ、午前一一時半、気車は洛陽をはなれて西へと進む。

中国の田舎の風景を車窓に眺めつつおよそ六時間余、黄土台を通過して西安に着き、夕刻、ホテル唐華賓館に入る。

一六日は前回の中国訪問の時に見学した碑林・大雁塔・陝西博物館・兵馬俑を巡る。

一七日、前回果たし得なかった待望の終南山山麓の寺院を巡拝する。

草堂寺　一七日朝、西安市街を離れたバスは田舎道を南に向かって走る。およそ二〇kmの道を約三〇分で草堂寺に到着した。中国仏教史上、三大訳経僧（法顕・玄奘と共に）の一人である鳩摩羅什の遺骨が収められている寺である。

鳩摩羅什（三五〇～四〇九）の父鳩摩炎はインドの宰相であったが、腐敗した政界を厭うて中国の西域地方に来て、天山山脈の南（シルクロードの北道）オアシス国家亀茲で、王妹ギバと結婚した。その間

に生まれたのが羅什である。従って父からインド語を母からは中国語を教えられ、経典の翻訳には頗る好都合であった。五〇歳を過ぎたころ後秦（五胡十六国の中の一国）の王姚興にむかえられて長安に入った。

羅什の漢訳経典は、阿弥陀経・維摩経・法華経・磐若経など四百巻余、特に阿弥陀経は、浄土三部経の一つとして、浄土系の宗派では常時読誦され、崇められ親しまれている経典である。

境内の中心に舎利殿があり、その中に羅什の遺骨をおさめた大理石製の塔がある。高さ二、六mで「姚秦三蔵法師鳩摩羅什舎利塔」と彫られている。塔の前に蹲って合掌する。阿弥陀経が漢訳されたのは弘始四年（四〇二）で、今からおよそ千六百年前である。当時訳経の道場には千人余におよぶ仏僧がその翻訳を聞いており、さながら釈迦説法の場のようであったという。

白馬寺山門前にて

舎利殿を出て右に鳩摩羅什三蔵記念堂がある。ここには高さ一mほどの羅什の座像が安置されている。像の前に鳩摩羅什三蔵法師尊者と書いた位牌がおかれ、後ろの壁に空中に舞い、楽を奏している美女が数人描かれている。天人ではなく美麗な中国服を着飾った若い女性である。なにか調子はずれの感がないでもないが、実は後秦国王の姚興が、すばらしい天才である羅什の子孫をのこしたいと、羅什の近側に若い美女数人を侍らせたという伝説を描いたものと思われる。

西北の隅に、朱で色どられた六本の柱が反りの強い中国風の屋根を支えている吹き抜きの堂がある。その中央に六角形の石で覆われた井戸がある。昔は黄昏時になるとこの井戸から水蒸気が霧のようにあたり一面にたち込めたという。

仮りの堂らしい中に、純白の玉によって造られた釈迦涅槃像が右脇に臥し、およそ四メートルもあろうかと思われる。いまだかつてこのような美麗な涅槃像を拝んだことがない。この仮堂の前面に、棟上けを終わった工事中の建物がある。およそ七間四面もあろうか、仮堂の涅槃像をここに安置するのであろう。境内にはこの外、約三〇メートル、七層の塼塔（煉瓦で積み上げた塔）が立っている。終南山を背景に見るこの塔は、羅什を偲ぶにふさわしい。

黄衣をまとった年老いた寺僧に別れてバスは次の香積寺に向かう。麦畑であろうか、緑の畑がかぎりなく続く。やがて前方に香積寺の塼塔が見えてきた。

香積寺　香積寺は唐の善導大師の遺骨を納めた舎利塔を中心にして永隆二年（六八一）に創建された。善導（六一二～六八一）は出家後、終南山（標高二七三〇メートル）で仏道の修行をしたが、悟りを得ることができず、山を下りて長安の一切経をおさめた経蔵に入り、この善導のいのちを救う経典に遇わせて下さいと心に念じ目をつむってふと立ち止まって手に触れた一部の経典を手にして経蔵から出た。その経典が「仏説観無量寿経」（略して観経という）であったという。善導は諸師の説を批判して独自の注釈を行った。これが有名な「観経四帖疏」である。親鸞聖人は「正信偈」の中で、「善導独明仏正意」と称え、高僧和讃の中に善導和讃が二六首ある。また親鸞の師法然は「偏依善導」といって法然の浄土教はひとえに善導の著書によったといっている。何れにしても善導大師は日本の浄土教にきわめて大きな影響を与えた。

千余年来の戦乱や風雨によって、もとの殿堂は姿を見せてくれないが、善導の遺骨を納めた舎利塔が唐時代のものとして残っている。昭和五五年（一九八〇）塔の修理が行われ、そのとき単層の大雄殿が造営されたという。大雄殿の中に善導の等身大で合掌姿の座像が安置されている。静かに跪座合掌すると像の口から念仏の声がもれてくるような気がする。

唐の詩人王維（七〇一？～七六一）が終南山に遊んだとき、この香積寺によって詠じた五言律詩がある。

終南山を目ざして歩くうちに
知らぬ間に香積寺によっていた
古木が立ち並んで　人の通った道もない　この深山にどこからか鐘の音が聞こえてくる　泉の水は岩に当たって咽び泣くようである　日の光が青い松の葉を通って冷やかである。やがて夕ぐれ時となって　人けのない川の淵で　一人の僧が毒竜のような心の煩悩を静めるように座っている（取意）

終南山の裾野、森林の中に、創建間もないころの香積寺のたたずまいを想起させる詩である。

興教寺　香積寺を出て田舎道をおよそ二〇分で興教寺につく。唐の総章二年（六六九）玄奘の没後五年、その遺骨を収めた供養塔を中心にして建てられた寺であるという。巨大な煉瓦造りの山門を入ると樹木の茂みの中に数多の堂が点在し、朱塗りの柱に緑と紫で彩られた三手先の肘木など、ただ驚嘆するばかりである。

中国仏教史上希代の高僧玄奘の遺徳をたたえるにふさわしい寺である。広い境内は三つの庭に区分され、東庭には一万巻に及ぶ宋版一切経を収めた経蔵がある。一切経の木版としては最もすぐれたもので、白鳥町長竜寺の経蔵所収の宋版一切経と兄弟分にあたる。拝観する時間がなくて中の庭にはいると、大雄宝殿に釈迦の座像が安置され、さらに西庭には玄奘とその弟子二人の舎利塔が立っている。煉瓦造りの塼塔で、創建以来千三百余年の風雪に耐え、戦乱の世をくぐって現在している姿に感無量である。

興教寺臥仏殿の三手先肘木

早朝からの緊張と感激の連続で疲れた身をバスに委ねて興教寺をあとにする。バスの窓から振り返ると、終南山は黄昏の残光につつまれて、私達を見送っているようである。

中国の旅はここに終わろうとしている。巡拝した古刹は想像していたのと全く異なって、よく整備され、荒廃した姿はどこにも見られなかった。共産革命や紅衛兵にも荒らされることなく、無事保護されてきたことは、さすが古い文化を大切にしてきた中国ならではと感銘を深めた。

上述の三か寺では他の観光客の姿は見られず、静かに巡拝することができた。恐らく普通の観光ルートには入っていないのであろう。特に今回、鳩摩羅什三蔵の遺骨を収めた草堂寺については今まで知らずにいた。阿弥陀経を常に読誦していながら全く汗顔の至りである。善導大師の遺跡香積寺もその名は聞いていたが、こんなにすばらしい古刹であることは、夢想だにしなかった。

また、玄奘三蔵の遺跡としては西安市内の大慈恩寺の大雁塔はよく知られているが、終南山の麓にこのような拡大な寺域をもち、すばらしい諸堂が完備した興教寺があることは一般の観光客にはよく知られていないのではなかろうか。

今回大垣の「仏像を拝む会」がこうした巡拝を計画されたお陰で、参加させていただいたわけである。当会の会長臼井千吉氏をはじめ会員の方々に深く感謝して、この稿を終わることとする。

竜門石窟　前方の川は伊水

興教寺三蔵塔門前にて

木蛇寺代々の墓によせて

加藤一男

東氏の菩提寺であった木蛇寺の境内であろうと思われる山麓に、木蛇寺代々之墓がある。

墓を管理されている遠藤さんが昭和五五年夏頃、墓台の破損がひどかったので、町内の石工を頼んで、墓台を改築した。

山石で築かれていた石積みの納骨穴（深さ一m、幅二〇cm余り）が発見された。

今までに多くの墓台を手掛けている石工さんが、こんな納骨穴は珍しいと写真をとっておいたとのことである。

墓石には「倶会一処」「木蛇寺代々之墓」と刻まれているが、建立した年月日は記されていない。

肥料袋に一ぱい程あった納骨から考えて、かなり多くの人々の骨であろうと思われる。

木蛇寺の納骨穴

倶会一処の墓標、縦穴の納骨穴などから、いつの時代にこの墓が建立されたものか推定できないのだろうか。

木蛇寺は、東氏二代行氏が建立し、開山は臨済宗の名僧徳瓊といわれている。京都五山の名僧で、東常縁の叔父二人、常縁の兄と弟、常縁の子計五人はいずれもこの木蛇寺で得度している（大和町史上巻五〇〇ページ参照）

応仁二年（一四六八）美濃国守護代斉藤妙椿が篠脇城を攻略したとき兵火にかかって焼失し、その後再建されたというが、永禄二年（一五五九）赤谷山城で東氏が滅亡したのちは廃寺となったものと思われる。

墓台の改築にあたって、納骨穴はそのままに周囲を玉石で築いたとの話である。

そもそも私が木蛇寺の墓に興味をもったのは、五年程前に写した一枚の写真からである。墓石をよく見ると倶会一処と刻んであるのに、どうしたことか、昔の高貴な方のお姿とも思われる影像が現れているのです。

明応三年（一四九四）篠脇城で逝去、木蛇寺に葬ったといわれる常縁公のお姿かもと思われてなりません。

こうしたことから、遠藤さんにこの写真を見せたところ、当墓の改築時の写真があるとのことからこの拙文を書いた次第であります。

木蛇寺代々の墓

町指定文化財

本年度、左の三件が町指定の重要文化財となりました。

一、東家資料七二件一〇六点
この資料は永年にわたって東・遠藤家で大切に保管されていた貴重な資料である。昭和六二年東家の当主胤驥氏から大和町が保管委託をうけて東氏記念館に保管していたのを平成六年十二月五日、胤驥氏から町へ寄贈されたものである。この資料は東・遠藤家の歴史を知る一級資料で、大和町にとってきわめて貴重な資料である。

二、中国古銭五四四〇枚
管理者　野口　遠藤巌氏

三、中国古銭一〇七〇枚
管理者　大間見　清水孝広
この二者は、中世の東氏との関係も考えられ、大和町の歴史を解明する上からも大変貴重な資料である。

高野山の霊域
奥の院

井俣初枝

幾たびも曲がりくねった山越えをしてようやく目的地へ着いたのが、海抜約九〇〇メートルの山上に拡がる大規模な宗教都市、高野山である。郡上でいえば蛭ヶ野のようなところかなと思った。

この高野山は、弘仁七年（八一六）、真言宗の開祖、空海によって開かれた。

高野山小史によると空海は高野山開創を朝廷に願い出るに際して、一書を作成したが、そこに次のような一文があり、開創の意図をよく伝えている。「私は少年のころから山歩きが好きで、あるとき、吉野から南へ一日、さらに西へ一日いったあたりに、高野とよばれる深い山の平地を見つけました。位置は紀伊国伊都郡の南にあるようで四方を高い峰に囲まれ、人がきた様子がありません。そんな閑静の地に、上は鎮護国家のために、下は大勢の修業道場を建てたいと思っています。」という一文が書いてある。もう一つには、「狩人伝承と導き犬の信仰」である。平安時代の中頃に書かれた「金剛峰寺建立修業縁起」によると、弘法大師は、今の奈良県五条市のあたりで、「南山の犬飼」と称する猟師に会い、高野山を譲り受けたとある。高野山ばかりではなく霊山にはこういう伝承は多いとも書いてある。深山であり険しい道のりを昔の人々は、徒歩で高野詣でをされ困難をきわめたにちがいない。今は、車で参詣できるんだからこんなありがたいことはない。

さて、私が神秘的な空気、静寂さに圧倒されたのは、奥の院である。弘法大師空海の御廟を中心とする墓所の入口となる一の橋を渡って参道を歩き始める。背の高い老杉が林立し昼なお暗いあの広大な墓原である。

奥の院という言葉は、よく俳句にもつかってある。高野山の俳人であられる森白象という方は、高野山の固有名詞をつかって作句されていた。奥の院という言葉を広辞苑でひいてみたら「神社または寺院の奥の方・最高所などにあって神霊または開山祖師などを安置する所」と書いてある。奥の院という言葉は知ってはいたけれど実際に行ったことがなかっただけにこの参道の墓原には、強い印象をうけた。

参道の両側には数えきれないほどの石塔が群をなしている。歴史上著名な武将や宗教家の墓塔、墓石がゆったりとした場所をもって建ち並んでいる。なかには苔むした墓もある。

こうした奥の院参道は、大師御廟に参る道であるとともに、霊域に眠る歴史上の有名無名の人々をとむらう道でもある。ただそのなかで奇妙にうつったのは、事業に関する会社の記念碑である。いずれおとらぬ立派な碑がたくさん建てられているということである。

一の橋から中の橋までの間に建てられている歴史上よく知られている人々は、平敦盛、熊谷真実、曽我兄弟、明智光秀、など。

また、中の橋以後には、豊臣家、それに親鸞上人、法然上人さまの供養塔があると説明してくださったけれどなかなかたくさんの人達のお墓だけに拝むことも、見ることもできず残念な思いをした。もう少しゆったりとした時間があればじっくりと歴史をふり返りながら当時の人達の思いをしのばさせていただけたのにとの思いを深くした。十万とも二十万ともいわれる墓塔、墓石のなかに、郡上の殿様青山さまの墓所があった。場所としては参道のすぐそばでひっそりと佇んでおられた。

奥の院で最大の石塔が崇源夫人五輪石塔で徳川二代将軍秀忠の二男、駿河大納言忠長が母堂（淀君の妹）の追善供養のために建てたものである。高さ十メートル、台石の広さ八畳で高野山一の大きさから「一番石塔」とよばれている。

高野山にて

霊気が漂うような雰囲気のなかに鈴の音が聞こえてきた。白装束に「同行二人」の菅笠をかぶったお遍路さんである。私達に軽く会釈をして幾団体ものお遍路さんが通りすぎていった。

「日本総菩提所」としての奥の院の信仰をささえているのは、いうまでもなく弘法大師空海であるといわれている。このおびただしい石塔群のほとんどは、鎌倉以降のもので、敵味方、宗派の違いなどまったく関係なく立ち並んでいるという。この大小さまざまな石は、すべて人の手によってここに運ばれてきたのだという。当時の人達の執念みたいなものを感ぜずにはいられない。

高野の春は、遅いという。奥の院の一の橋近くの清浄心院の庭に高野山でもっとも大きな山桜の樹だと案内の方が話された。高野の春は、各地の花だよりの声が聞こえなくなる頃この桜は咲くんだといわれた。

清浄の雨でぬらした参道の石畳を歩きながら空海が修禅の地としてここを選んだのを俗界から隔絶された土地だからと私なりに感じたことである。

平成九年度 事業計画（案）

4月　執行部会
5月　執行部会、役員会、監査会
会報「文化財やまと」第22号発行
6月　執行部会、総会ならびに研修会（講演会）
7月　東氏館跡庭園・桜並木および、阿千葉城跡管理作業奉仕
〃　執行部会、役員会　文化財収蔵展示館（仮称）設置促進委員会の結成と運動の展開
8月　薪能協賛
9月　執行部会
10月　役員会
11月　執行部会、日帰り研修旅行
12月　執行部会、役員会（懇親会）
2月　執行部会
3月　役員会、1泊研修旅行

平成八年度 事業報告

5月20日　執行部会、役員会の開催について
5月31日　役員会、平成7年度事業報告、平成7年度会計決算報告、平成8年度事業計画、平成8年度予算、平成8年度総会の期日、日帰り研修旅行について　21名
6月16日　美並村に於いて開催の郡上郡文化財保護協会総会及び文化財巡り参加　7名
6月20日　会報「文化財やまと」21号発行
6月27日　執行部会　総会開催準備打ち合わせ
6月29日　平成8年度総会開催記念講演、「円空の宗教的背景」講師　美並村文化財保護審議会委員　池田勇次先生　35名
7月11日　執行部会　文化講演会準備打ち合わせ
7月13日　本会および郷土史研究会共催の文化講演会開催演題「古今和歌集」について　講師文学博士小松茂美先生（センチュリーミュージアム館長）85名
7月29日　執行部会、東氏館跡等清掃奉仕について打ち合わせ
8月2日　東氏館跡庭園および阿千葉城跡の清掃奉仕、特に今年も池泉の浚渫を入念におこなった　37名
8月7日　薪能「くるすざくら」協賛　特に今年は、千葉県東庄町議長、助役以下22名の郷土史研究会員等が来町史跡巡り薪能観賞などの案内に対応した
10月8日　八幡町を会場とする山内一豊&千代サミット参観
11月12日　執行部会、日帰り研修計画、役員会開催について（旅行社を招く）
11月15日　役員会、日帰り研修旅行計画について　12名
11月18日　執行部会、日帰り研修旅行準備打ち合わせ
11月25日　日帰り研修旅行実施、京都市東寺及び桃山城　49名
11月17日　執行部会　役員会の開催準備等打ち合わせ
12月24日　執行部会、岐阜バス旅行センターを招き1泊2日旅行計画
1月9日　執行部会、1泊研修旅行につき再度業者を招きコース会費など決定、文化財収蔵展示館の建設促進について
1月21日　1泊研修旅行会員募集始める
2月26日　役員会、文化財収蔵展示館（仮称）設置促進運動について他　16名
3月24日　執行部会、1泊研修旅行の準備等について
3月28～29日　1泊研修旅行実施、和歌山県高野山金剛峰寺・粉河寺・叡福寺など　39名

研修旅行随想

河合俊次

本年度の町文化財保護協会の一泊研修旅行は、いつの間にか慣例となった所謂古寺巡りが行われ、本年は高野山行きが実施された。

しかしよく考えてみると古寺巡りが中心となったこの旅行は、とても素晴らしく、他の何ものにもかえ難い意義ある行事といえよう。これらの旅行の大半は近畿圏を中心とした古寺であり、古きよき仏教文化の聖地でもある。

さて、日本歴史をひもといてみると六世紀半ばに仏教が日本に伝来して以来、仏教は日本人の心の奥深く根ざし、たえずあたたかさ、親しさ、優しさ、慈しみの心を育ててきた。時には権力者の束縛の中で、飢えや殺りくや荒廃の中で常に日本人らしい心の潤いを保ち続けてきたが、その裏には、やはり日本人の仏教に帰依していた心の支えがあったからだと考えずにはおられない。

古寺巡りを行い、み仏を礼拝していると私は何時もこのことを憶い起こすのである。合掌しながらじっとそのお顔を見つめていると美術彫刻とか文化財とかを通り越えて、み仏たちが語り伝えようとしている有為転変の歴史のことどもが私の心の奥深く刻み込まれていくような錯覚に陥るのである。

文化財保護協会のこの旅行は今後とも行われていくものと思うが、参加者はその都度多くの思い出が残り、感慨が生まれてくる。私達はこれらをそれぞれに咀しゃくし活用して自分の生活を豊かにしていきたいものである。

中国三大石窟の一つ竜門石窟仏。千六百～千二百年の間風雪・戦禍、等に晒されて極彩色は落剥し損傷甚だし。至芸の本名像は唐代作の文殊菩薩。

文芸欄

俳句

高橋義一

日輪と凍てる雲海を飛びにけり

竜門窟（りゅうもんくつ）億万の仏龕（ひびぎ）割れす
（洛陽。唐代まで四百年間約一〇万体造営）

着膨れる兵馬の俑（よう）と笑ひ合ふ
（西安。秦始皇帝墓陵の内）

駆け登り彼岸俯瞰（みおろ）す大雁塔
（西安。玄奘（げんじょう）訳経の大雁塔）

杏（あんず）咲き窯洞（やおとん）所々に息衝（づ）けり
（窯洞＝人工の洞窟住居）

二階列車くねりくねらせ山笑ふ

金剛杖（じょう）花の高野に寄せ返す

花に埋め夕日がわれを翳にす

花みやげ留守居の神にささぐべく

待ちわびてにじり寄れるは孕猫（はらみ）

〝南無金剛〟中国～高野山参り報告書

金剛＝金剛界・金剛身（仏身）・金剛杵（しょ）等の略。また空海の阿闍梨名で、師の恵果から長安青竜寺で授けられたもの。

高野山春日あまねき仏たち　山下照代

大杉木立磴長閑

花馬酔木（ハナアセビ）大師足跡高野山

御廟橋　遍路の鈴音法の風

大師札かかげて花の旅おわる

高野山春日あまねき仏たち　覓明代

大師堂出て次の寺花降れり

春潮のうごくともなき和歌の浦

花の雨遠しともせず金剛峰寺

古墓群抱きて霊峰花冷えす

霧まとふ群墓高野の奥の院　黒岩きくゑ

史蹟名刹浅春の仏たち

女人もきこしめす坊の槃若湯

椿落ち仏足石を輝かす

春愁の解けし高野の地を踏みて　桑田和子

宿坊の僧の手造り木の芽和え

霊山の香のうつりか花衣

春風や千古の法灯ゆらぎをり　井俣初枝

清浄の花の雨ふる奥の院

宝号を唱えお遍路奥の院

花の雨道ひと筋や奥の院

奥の院陀千古の宝灯春の雨

短歌

高野山

栗飯原　明子

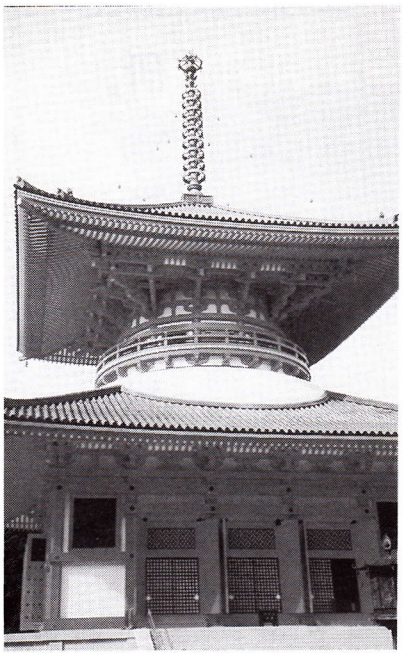
つづら折る道登り来て日にひかる
金剛峯寺の多宝塔見上ぐ

空海の廟所に並ぶ五輪塔かたへに
木造霊屋のあり

宿坊の赤松院内いく曲りうぐいす
張りを踏みて通るも

虎の彫り左甚五郎作と聞くやさし
き顔は猫にも見えし

高野山続く道のり遠くしてもの運
びたる昔人想う



高野山の多宝塔

高野山

土松　新逸

大日如来阿弥陀如来並びますみ堂
につつしみ手を合わすなり

国宝の不動明王拝しつつ八百年の
歴史かしこし

老杉の木立の下にひっそりと戦国
武将の墓は並べる

血を流し戦いし武将たちの墓仲良
く並ぶ皆苔むして

山上に日にかがやける大伽藍弘法
大師のみ心しのぶ

春の足音

木嶋　三郎

春立ちて霞む山並陽に光る野辺の
笹生の緑眼にしむ

まなかいの果てまだ残る雪白く暮
れゆかんとす白山の峯

散り敷ける椿の紅き花びらをつめ
たく包み雪降りつもる

春雨の煙るがに降る庭先に木々た
ち並ぶ息する如し

早春の光あまねし浅雪の下くぐり
ゆく沢水のごと

伸び初め緑の木々の下ゆけば地肌
の冷えに汗ひきてゆく

初夏の山まだ涼しうぐいすの声と
おるなり林の中に

木々の緑したたる初夏の山に立ち
何か嬉しく雲を見ており

音立てて風吹きすぎる木々の下に
座りてしばし思うことなし

酒の場で握手かわして名を告げし
人の名思う顔洗いつつ

山頂に我が吟詠の声さえて澄みし
大気の中にとけゆく

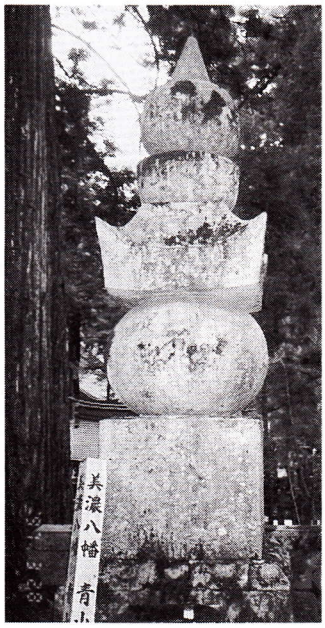
友

八月に尋ね行くぞと便あり友を待
つ日の長かりしこと

再会を約して別れし其の日より君
を忘れし日はなかりけり

久し振りに友と語ろう夜はふけて
窓辺の松は月にぬれおり

久し振りに相見し友と嬉しみを友
に分かちて酒酌みかわす



奥の院　郡上八幡
青山藩の五輪塔

敬弔

故　森藤幸さんを偲びて

大和町史編集副委員長として、『大和町史』（資料編・通史編上・下巻）の編集に、また文化保護協会副会長、会長として多年に亘りご尽力され、当町の文化事業に多大の貢献をして下さっていた森藤幸さんが本年四月七日八十九歳の生涯をとじられました。

森藤さんは西川村役場職員としてまた町村合併後は大和村教育長として多年ご尽力されました。近年は町史編集委員として、また郷土史研究会員としてお元気な顔を見せて下さいました二、三年前から少しお体の調子を害されておられましたが、まだお元気と思っておりましたのに四月七日の朝ご逝去の報に接し悲しみに耐えませんでした。

ここに謹しみて哀悼のことばを申し上げます。

平成九年　四月末現在

会員名簿

（順序不同）

― 剣 ―

山下運平（顧問）　八八・一一四〇六
籏　勝美（顧問）　八八・一一〇三一
村瀬喜八　八八・一一一一二八
河合俊次（理事）　八八・一一二四六
畑中澄子（理事）　八八・一一五〇七
畑中定夫　八八・一一一六八
小池久江　八八・一一五七六
山下ふみえ　八八・一三一二七
加藤正恵　八八・一一一〇七
高橋　明　八八・一一四八八
日置照郎　八八・一一〇七二
加藤文蔵　八八・一一八〇二
佐藤光一（理事・会計）　八八・一三二〇一
田中　和久　八八・一一二〇〇
高橋義一（理事）　八八・一三七九二
河合　恒　八八・一一三五八
河合芳英　八八・一一三〇四
加藤小弋　八八・一一三一九
奥村千代子　八八・一一〇一二
武藤正文（理事）　八八・一三一九〇
田仲龍子　八八・一一三六一
山下昭代　八八・一一四〇六
畑中節子　八八・四一五六
佐藤八重子　八八・一三一〇一
畑中文子　八八・一一三四一
畑中初枝　八八・一三四七四
新蔵　守　八八・一一三七五
野田八重子　八八・一一一六二
高橋叙子　八八・一三七九二
河合芳江　八八・一一二四六
佐藤富貴子　八八・一一八八九
山本みね子　八八・一一六七一
豊鷲見美代子　八八・一一八三五
野田三枝子　八八・一三一六九
古池房江　八八・一三五二三
山田しずえ　八八・一三一九六

― 大間見 ―

村井正蔵（監事）　八八・一一三二一三
青木新三　八八・一一四三六
日置　繁（理事・書記）　八八・一一二五四
大野紀子　八八・一一二三〇
野田英志（理事）　八八・一一一八五
小野江選量（理事）　八八・一一七二六
清水一作　八八・一三〇八六
山下直美　八八・一三九三八
池田充彦　八八・一三〇九〇
小野江勉　八八・一一七二五
池田道子　八八・一一八七九
日置智恵子（理事）　八八・一三〇五一
坪井政夫　八八・四〇九二
松井賢雄（理事）　八八・一三九九一
古田　忠　八八・四〇九〇
藤代順行　八八・一三〇六〇
大野一道　八八・一一一三〇
玉木吉郎　八八・一三九一五
青木ふじ枝　八八・一一一〇三
小野木花子　八八・一一七四七
青木ユリ子　八八・一三四七七
日置哲夫　八八・四五一九

― 小間見 ―

平沢　勤（理事）　八八・一三九三七

― 万場 ―

畑中浄園（副会長）　八八・一一四四一
畑中真澄　八八・一一四四一
石神尭生　八八・一一四一三
稲葉春吉　八八・一一五〇三
黒岩きくゑ　八八・一一四六〇
筧　明代　八八・一一五三一

― 河辺 ―

三島秋男（理事）　八八・一一四六一
桑田和子　八八・一一四一九
桑田渥見　八八・一一四四六
桑田信夫　八八・一一四一八
黒岩弘美　八八・一一四五八
井俣初枝（理事）　八八・一一七五八
青地正男　八八・一一四四七
大井静子　八八・一一三三八
大井正明　八八・一一八九四
籏　等　八八・一一七五九
桑田アサ子　八八・一一四三九
井上妙子　八八・一三五〇八
沢原　勝　八八・一三一五〇
山田武司　八八・一一四七五

― 徳永 ―

木島泉（理事）　八八・四一八二
鷲見清（理事）　八八・一一〇〇五
鷲見おと　八八・一一一八九
直井すゞ江　八八・一三五九二
矢野原幸子（理事）　八八・一一〇七七
水野志づ子　八八・一一六一〇
山内孝一　八八・一一六一六
木島洋女　八八・一一五九一
土松新逸（会長）　八八・一一七三一
遠藤賢逸　八八・一一一二一
渡辺明夫　八八・一一六九五
木島三郎　八八・一三五九〇
矢野原吉夫　八八・一一一三九
村瀬弥一（理事）　八八・一一六〇二
渡辺文子　八八・一一六九五

― 神路 ―

清水幸江（理事）　八八・一一〇一九
横枕千代子　八八・一一三四九
清水テル子　八八・一一〇二一
前田　孝　八八・一一一〇一
前田　鈴　八八・一三六六六
臼田とも子　八八・一一二五〇
臼田百合子（理事）　八八・一一〇四六
前田和美　八八・一三六六六
岩谷ひとみ　八八・一一六八三
岩谷千代子　八八・一一一一一
横枕七右衛門　八八・一一三四九
岩谷さち　八八・三一四八

― 牧 ―

羽生　清　八八・一三七三〇
山田真人（理事）　八八・一一一一四
金子政子　八八・一三四二六
滝日準一（理事）　八八・一一七〇五
粟飯原常人　八八・一一三六二
土松康二　八八・一一七二九
日置貞一　八八・一一六六二
土松貞二　八八・一三九八〇
日置　昇　八八・一三六三六
遠藤米吉　八八・一三六三七
遠藤光平　八八・一三九八一
遠藤周一　八八・一一八九〇
滝日義一（理事）　八八・一三〇六二
滝日　治　八八・一三四〇六
田口勇治　八八・一三九五〇
斎藤太門　八八・一三九二二
松森　茂　八八・一三九二三
加藤一男　八八・一一八七〇
清水　定　八八・一一七一〇
日置元衛　八八・一三四一七
粥川　溜　八八・一一三三七八
本田欽一（理事）　八八・一三一六〇
野田嘉明　八八・一三〇四三
尾藤佐紀子　八八・一一三五三
加藤登美子　八八・一一八七〇
滝日和子　八八・一三〇六一
遠藤甲子男　八八・一三九三五

― 栗巣 ―

島崎増造（監事）　八八・一一一三六
増田洋子　八八・四〇四一
筧政之助（理事）　八八・四〇三一
中山周左ェ門　八八・一一七二八
武田信康　八八・一一一八四
鷲見豊夫　八八・一一七八八

野田光誠	八八・四〇二七
―古道―	
細川　優（理事）	八八・二八六一
清水克巳	八八・二八六二
清水行雄	八八・三九〇八
歳藤堅正	八八・三九七九
清水久子	八八・三九〇八
―名皿部―	
有代真一	八八・三七九一
有代和夫	八八・二二〇一
森下正則	八八・三四一三
下広茂一	八八・三八九五
佐尾チドリ（理事）	八八・三五四四
立石春枝	八八・三八八五
鷲見昭三	八八・三四三一
―島―	
森藤雅毅（理事）	八八・二六八四
須甲甚一（理事）	八八・二六六七
山田長次	八八・三六四八
山田昌枝	八八・三六四八
森　数雄	八八・二五五四
田中　篤	八八・二七九二
奥田昌明	八八・二五二〇
直井篤美	八八・二六二二
此島修二	八八・三六五九
直井洋子	八八・二六二二
雉野尚子（理事）	八八・三五六四
遠藤利雄	八八・三五二六
石井敏子	八八・二五〇二

平成8年度　決　算　書

（収入の部）　（単位：円）

項　目	予算額	決算額	増　減	摘　要
前年度繰越金	41,184	41,184	0	
会　費	1,819,000	1,730,000	△89,000	
会　費	329,000	320,000	△9,000	正会員 2,000×153 家族会員1,000×14
特別会費	1,490,000	1,410,000	△80,000	日帰研修 8,000×49 宿泊研修 25,000×39 特別徴収1,000×2,000 役員会 2,500×16
補助金	80,000	80,000	0	
寄付金	1,000	22,000	21,000	
諸収入	816	100	△716	
合　計	1,942,000	1,873,284	△68,716	

（支出の部）

項　目	予算額	決算額	増　減	摘　要
会議費	120,000	34,259	△84,741	
総会費	50,000	25,500	△24,500	
役員会費	70,000	8,759	△61,241	
事業費	1,665,000	1,546,607	△118,393	
研修費	1,540,000	1,414,432	△125,568	日帰研修419,831 宿泊研修950,543 役員研修44,058
会報発行費	75,000	70,040	△4,960	
事業費	50,000	62,135	12,135	
事務局費	5,000	1,090	△3,910	
消耗品費	2,000	0	△2,000	
通信費	2,000	1,090	△910	
旅費	1,000	0	△1,000	
県本部会費	80,000	72,000	△8,000	
積立金	60,000	60,000	0	重要資料出版基
予備費	12,000	4,565	△7,435	七日祭小祭挙酒 1,990 郡上史誌増刷 2,575
会　計	1,942,000	1,718,521	△223,479	

平成9年度　予　算（案）

（収入の部）　（単位：円）

項　目	予算額	前年度予算額	増　減	摘　要
前年度繰越金	154,763	41,185	113,578	
会　費	1,806,000	1,819,000	△13,000	
会　費	316,000	329,000	△13,000	正会員 2,000×151 家族会員 1,000×14
特別会費	1,490,000	1,490,000	0	日帰研修 8,000×40 宿泊研修 28,000×40 役員会 2,500×20
補助金	80,000	80,000	0	
寄付金	1,000	1,000	0	
諸収入	237	815	△578	
合　計	2,042,000	1,942,000	100,000	

（支出の部）

項　目	予算額	前年度予算額	増　減	摘　要
会議費	120,000	120,000	0	
総会費	50,000	50,000	0	
役員会費	70,000	70,000	0	
事業費	1,765,000	1,665,000	100,000	
研修費	1,590,000	1,540,000	50,000	日帰研修 320,000 宿泊研修 1,120,000 役員研修 150,000
会報発行費	75,000	75,000	0	
事業費	100,000	50,000	50,000	
事務局費	6,000	5,000	1,000	
消耗品費	2,000	2,000	0	
通信費	3,000	2,000	0	
旅費	1,000	1,000	0	
県本部会費	72,000	80,000	△8,000	
積立金	60,000	60,000	0	重要資料出版基金の積立
予備費	19,000	12,000	7,000	
会　計	2,042,000	1,942,000	100,000	

収入 1,873,284 － 支出 1,718,521 ＝154,763円（9年度へ繰り越し）
積立金会計　7年度60,000円、8年度60,000円　合計120,000円（郵便局定額貯金）

編集後記

▼「光陰矢の如し」今更古い諺を引き出して恐縮でありますが、真理は時代を超えて、私達にせまるものがあります。前号を発行したのがつい昨日のことのように思えますが、それからもう一か年、第二二号をおとどけすることになりました。

▼咲くべき花は咲き、散るべき花は散って、視界は一面うす緑の若葉につつまれています。会員の皆様には無事お消光でしょうか。生は偶然、死は必然と、どなたかがいわれた言葉が思い出されます。

▼巻頭で会長さんが述べておられるように、昨年は多量の中国の古銭が発見されて、中世室町時代の経済状況の一端が知られ、郷土の歴史の解明に大きな手がかりとなりました。会員の皆様を始め町民の方々に見ていただく機会を得たいと思います。

▼やがて暑さもきびしくなります会員各位のご健勝を念じて後記とします。

（五月下浣畑中記）

「文化財やまと」第二二号　平成九年六月一日発行　発行者／大和町文化財保護協会　代表者／土松新逸　印刷者／白鳥印刷